

【国宝（美術工芸品）の指定】

<彫刻の部>

（重要文化財を国宝に 2件）

① どうぞうしやかによらいぞう 銅造釈迦如来倚像 一軀

【所有者】宗教法人深大寺（東京都調布市深大寺元町5-15-1）

【大きさ】像高60.6cm

明るい表情を浮かべた少年を思わせる面貌や、体に密着して肉付けの起伏をあらわにみせながら流麗な衣文が表される着衣など、いわゆる白鳳仏の特色をよく示し、飛鳥時代後期の名品として知られる作例である。製作は7世紀後半ないし末と推定される。

近年、飛鳥後期の美術に関し、外来影響の受容のありさまや材質技法の特色など研究が進展したことを踏まえ、この時代の代表作の一つとして国宝に指定する。（飛鳥時代）



② もくぞうゆいまこじぞう 木造維摩居士坐像 一軀

【所有者】宗教法人法華寺（奈良県奈良市法華寺町882）

【大きさ】像高90.8cm

古くより肖像彫刻の名品としてよく知られる像である。口を開き発語する瞬間を捉えた写実的な面貌表現は天平彫刻的であるが、側面観での力強い構えには平安前期につながる特色がうかがえる。

藤原鎌足が創始したとされ興福寺で最も重要な法会であった維摩会が8世紀後半に一時期、興福寺から法華寺に移されて行われており、この時に造立されたとみられる。

乾漆像として重要文化財に指定されていたが、X線CT撮影などにより木彫像としての技法や保存状態が確かめられた。（奈良時代）



(重要文化財を統合して国宝に 1件)

- ① { もくぞうだいにちによらいざぞう
木造大日如来坐像 一軀
もくぞうふどうごうざんぜみようおうざぞう
木造不動降三世明王坐像 二軀

【所有者】 宗教法人天野山金剛寺（大阪府河内長野市天野町996）

【大きさ】 像高 大日313.5cm／不動201.7cm／降三世230.1cm

しんごんそうあかん はちじょういん
真言僧阿観が八条院の帰依を得て建立した河内金剛寺金堂の本尊像で、3メートルを越える巨大な大日如来像を中尊とする三尊像である。中尊は金剛寺の草創期である1180年前後の作で、大きさ、できばえともにこの時代の大日如来像を代表する作例と言え、光背・台座に弘法大師空海に由来する図像的な特色を示す点でも注目される。不動・降三世明王は最近の保存修理で銘文が確認され、てんぷく仏師快慶の弟子、行快が天福2年（1234）に造ったことが判明した。三尊としての構成はちしょうだいしえんちん智証大師円珍が中国よりもたらしたとされるそんしやうまんだら尊勝曼荼羅に依拠しており、この図像になる唯一の遺品としても貴重である。

保存修理に伴い、この度、初めて本格的な調査が実施された結果、この三尊像がおよそ半世紀をかけて造られ、以後おおむねその状態をとどめて今日まで伝えられてきたことが明らかになった。これを受けて国宝に指定する。

（平安時代・鎌倉時代）



<書跡・典籍の部>

(重要文化財を国宝に 1件)

① 法華經 (久能寺經)

四巻

【所有者】個人

【大きさ】随喜功德品第十八 (縦26.7cm 全長196.4cm)

本經は鳥羽上皇とばじょうこう (1103～1156)らが結縁して書写した法華經で、久能寺經と通称され、平家納經と並び平安時代後期を代表する装飾經として貴重すなはちなものである。結縁者には女性が多い。料紙には美しい染紙を用い、金銀箔・砂子などを散らした上に蝶、鳥、蓮華などを彩繪している。

装飾經のなかでも出色の出来栄えであり、また現存する久能寺經のなかで作成当初の表紙・見返など原装を伝える唯一のものである。

(平安時代)



(重要文化財に有形文化財を追加して国宝に 1件)

① 宋版一切経

六千二百帖

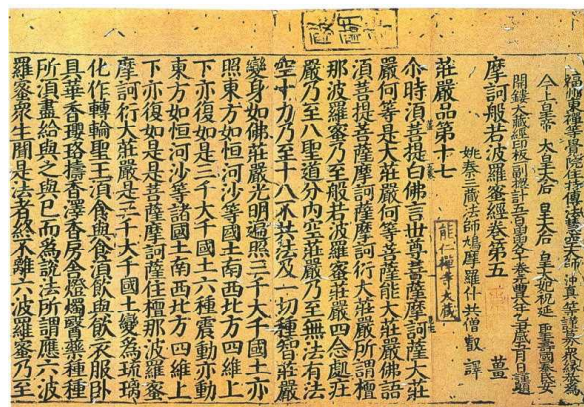
【所有者】宗教法人醍醐寺（京都府京都市伏見区醍醐伽藍町1）

【大きさ】縦29.6cm 横11.7cm

本一切経は、南宋初期に印刷刊行されたもので、当時の姿を留めるとともにほぼ完存する一切経の代表的な遺品として貴重である。なかには北宋の能書家である蘇軾（1036～1101）が書写した經典をそのままに印刻したのも含まれている。

経箱には慶元四年（1198）銘が確認され、経巻・経箱ともに南宋時代の製作になることが判明した。

（南宋時代）



<古文書の部>

(重要文化財を統合し、有形文化財を追加して国宝に 1件)

① 平城宮跡出土木簡

三千百八十四点

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園13-9）
奈良文化財研究所保管

本件は、平城宮跡から出土した木簡のまとまりである。木簡には文書木簡、荷札・付札木簡などがある。

律令国家が編纂した史書の総称である六国史などの記録に伝えられていない奈良時代の社会や経済などの実態を具体的に知りうる貴重な史料である。木簡には同時代史料、日常的な史料が多く、歴史解明にとって重要な文字史料である。

（奈良時代）



<考古資料の部>

(重要文化財を国宝に 1件)

① 奈良県東大寺山古墳出土品

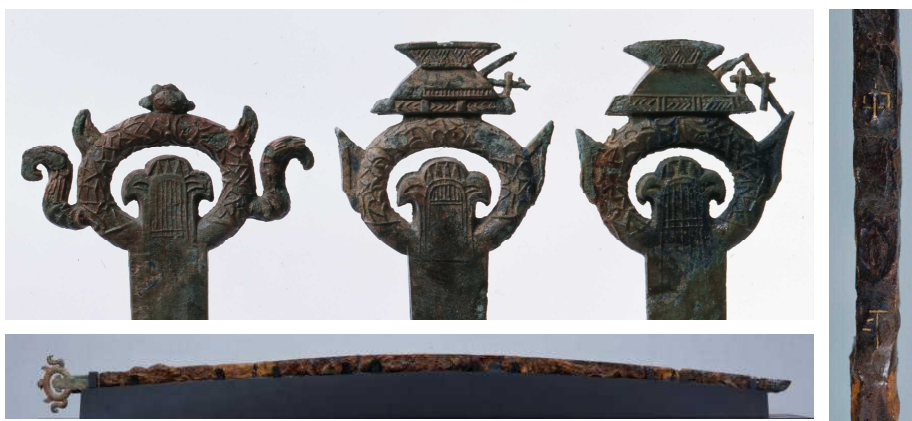
一括

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園1-3-9）
東京国立博物館保管

本件は、奈良県天理市の前方後円墳から出土した一括である。特筆すべきは「中平」年銘のある金錯銘花形飾環頭大刀で、古墳時代における金石文の最古かつ代表的遺品として知られる。また、他に例のない花形飾環頭大刀、家形飾環頭大刀をはじめ、鍬形石や車輪石、銅鏃など多種多量の副葬品があり、古墳時代前期後半を代表する資料群としても貴重です。

近年これらの再調査および保存修理が行われるとともに、発掘調査から約半世紀を経て総括報告書が刊行され、本件を主題とした展覧会も開催されるなど再評価が進んでおり、このたび国宝に指定する。

(古墳時代)



【重要文化財（美術工芸品）の指定】

＜絵画の部＞

（有形文化財を重要文化財に 7件）

① しほんぼくがちようじゆうじんぶつぎがこうかんだんかん
紙本墨画鳥獣人物戯画甲巻断簡 一幅

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園1-3-9）
東京国立博物館保管

【大きさ】縦30.7cm 横83.2cm

本件は、京都・高山寺に伝来する国宝「鳥獣人物戯画」四巻のうち、甲巻の第十六紙の前に繋がる部分である。国宝絵巻には認められる「高山寺」の朱印が捺された形跡がなく、比較的早い時期に分断されたものと考えられるが、先般の国宝四巻の解体修理に伴う詳細な調査により、もともとは一連のものであったことが明確になったため、重要文化財に指定する。
（平安時代）



② しほんきんぢやくしよくまつず
紙本金地著色松図 六曲屏風 一隻

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園1-3-9）
東京国立博物館保管

【大きさ】縦153.2cm 横346.8cm

本件は、中世にさかのぼるやまと絵屏風の代表的作例である。一部の室町時代絵巻の中に類似した様式を見出すことができるが、本図はそのような作風を示す屏風作品としてきわめて貴重である。空も土も全て金箔を押す総金地屏風の現存最古の遺例として注目される。（室町時代）



③ けんぼんちやくしよくいつきゆうそうじゆんぞう 絹本著色一休宗純像 一幅

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園13-9）
奈良国立博物館保管

【大きさ】縦113.8cm 横56.8cm

本件は、室町時代に活躍した臨済僧^{りんざいそう}、一休宗純の肖像画である。一休画像は比較的多数現存するが、本図はその中で、最も早い時期の自賛を伴う作品で、壮年の姿を表わす画像^{はんか}である。他の祖師^{しゆだち}の画像ではほとんど例を見ない半跏姿に、長大な朱太刀を添える独特な形式を示す。（室町時代）

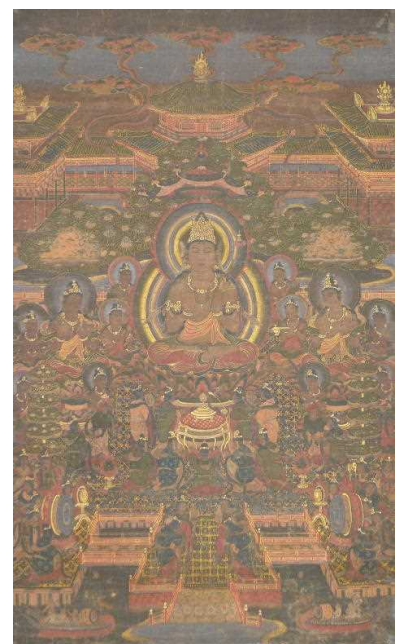


④ けんぼんちやくしよくとそつてんまんだらず 絹本著色兜率天曼荼羅図 一幅

【所有者】宗教法人誓願寺（岐阜県岐阜市伊奈波通1-43）

【大きさ】縦45.0cm 横27.0cm

本件は、弥勒菩薩の浄土の様子を描く兜率天曼荼羅図^{とそつてんまんだらず}の遺例で、細部まで堅実な描写を示し、14世紀の制作とみられる。作例の少ない同画題の中で、正面向きの構図を示す遺例としては比較的古い一本で、小品ながら保存状態がきわめて良好である。（鎌倉時代）



⑤ ^{かのうまさのぶ} 伝狩野正信筆 絹本着色日親像 一幅

【所有者】宗教法人本法寺
(京都府京都市上京区小川通寺ノ内上る本法寺前町617)
【大きさ】縦94.1cm 横41.6cm

本件は、^{ほんぼうじ}本法寺を創建した日親上人の肖像画である。狩野正信はさまざまな文献から、数多くの肖像画を描いたことが知られているが、確かな遺例は存在しない。本図は同寺に伝わる桃山時代の文献『^{とうぼくがせつ}等伯画説』に正信筆と記されるもので、画風からその可能性がもっとも高い作品である。
(室町時代)



⑥ ^{かんのみきやう} 絹本着色三十三観音図 ^{みんちやう} 明兆筆 三十一幅

【所有者】宗教法人東福寺 (京都府京都市東山区本町15-778)
【大きさ】各 縦118.5cm 横54.5cm

本件は、『^{かんのんきやう}観音経』に基づく連幅で、各幅上部円相内には観音の姿を大きく描き、下部には観音が様々な姿に変化して衆生^{しゆじやう}の前に現れるさま、もしくは観音が種々の苦難から衆生を救済するさまを描く。応永19年(1412)、明兆(1351~1431)によって描かれた基準的作例である。
(室町時代)



⑦ けんぼんちやくしよくねはんへんそうず
絹本著色涅槃変相図

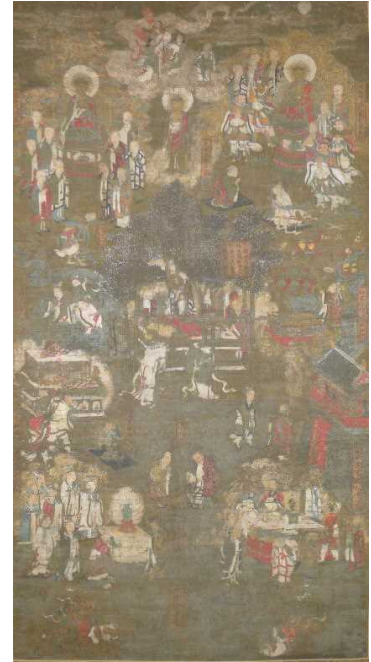
一幅

【所有者】宗教法人叡福寺（大阪府南河内郡太子町太子
2146）

【大きさ】縦110.2cm 横59.4cm

本件は、釈迦の涅槃の情景を中心に、その前後の場面を周囲に描き込む涅槃変相図である。描写から南宋時代の制作と見られ、図様には中国天台宗の影響が指摘できる。もと京都・泉涌寺せんにゆうじに伝来したもので、泉涌寺の僧侶らが中国からもたらした可能性も指摘される。鎌倉時代に日本にもたらされた宋画の涅槃図の遺例として文化史上きわめて貴重である。

（南宋時代）



<彫刻の部>

（有形文化財を重要文化財に 4件）

① もくぞうせんじゆかんのんざぞう
木造千手観音坐像

一軀

【所有者】お薬師様文化財保存会（宮城県大崎市田尻小松字寺浦）

【大きさ】像高98.8cm

『日本往生極楽記』に名がみえる小松寺こまつじの本尊として伝来し、明治初年になり隣接する薬師堂に移された千手観音像で、近年学界にその存在が知られた。

中尊寺金色堂に安置される奥おく州藤原氏三代もとひらに関わる諸像、とりわけ二代基衡のために造られた一群と類似する作風がうかがえるところから、12世紀後半に平泉の寺院の造仏に携わった仏師の手になるとみられる。二重まぶたの目や、背面で吉祥天や女神のように髪をたわませて結い上げる髪型が珍しく、注目される。院政期における東北地方の仏像製作の様子を知る上で重要な遺品である。

（平安時代）



② ^{もくぞうふどうみょうおうりゆうぞう}木造不動明王立像

一軀

【所有者】宗教法人恵明寺（東京都葛飾区亀有3-32-25）

【大きさ】像高51.3cm

優美な曲線でまとめた体の輪郭や、浅く整えられた衣のひだ、小づくりな目鼻立ちに院政期の特色をよくみせる作例である。小像ながらできればは大変優れている。近年、^{きりがね}修理が行われて表面を覆っていた汚れが除去された結果、^{きりがね}切金をまじえた当初の彩色が鮮やかに残っていることが判明した。切金の技法は極めて巧緻で、また瞳に異材（鉛）を嵌めているのは、次の時代に用いられた玉眼技法につながるものとして注目される。

このように、近年新たにその価値が見いだされた名品として指定する。（平安時代）



③ ^{もくぞうあみだによらいおよびりょうきようじざぞう}木造阿弥陀如来及両脇侍坐像

三軀

【所有者】宗教法人廬山寺

（京都府京都市上京区寺町通広小路上る北ノ辺町397）

【大きさ】像高 阿弥陀100.6cm 両脇侍65.3/63.6cm

13世紀初めの製作と推定される作例で、^{らいごうあみだぞう}来迎阿弥陀像と称される、臨終を迎える者の許に出現した阿弥陀如来と観音・^{せいし}勢至菩薩をあらわした彫像である。両菩薩は膝を揃えた坐り方で、衣が後方に強くなびく様子を表すことで、来迎のスピード感を強調しているのが注目される。また勢至菩薩は元来、両手で往生者に差し掛ける天蓋を執っていたとみられ、彫像では珍しい図像である。当代の来迎彫像の優品として注目される。（鎌倉時代）



④ ^{もくぞうしんぞう}木造神像
^{もくぞうずいじんりゆうぞう}木造隨身立像

十一軀

四軀

【所有者】宗教法人南宮神社（^{なんぐう}広島県府中市栗柄町2980）

【大きさ】像高（神像）42.2～63.3cm（隨身）100.3～138.5cm

^{びんごこくふ}備後国府跡の近くにある南宮神社の本殿に御神体として伝来した神像群と、同社の門に安置される、隨身と称される左右一対の神像二組である。平安末期から鎌倉前期にかけての製作とみられる。男神4軀と女神3軀は同じ作者の手になるとみられるが、年齢や性格などを作り分けているのが注目される。近年の調査で見出された作例である。

（平安時代・鎌倉時代）



<工芸品の部>

（有形文化財を重要文化財に 5件）

① ^{くろべりにんずじきくすいもんようこそで}黒紅綸子地菊水文様小袖 一領

【所有者】大学共同利用機関法人人間文化研究機構
 （東京都港区虎ノ門4-3-13）

国立歴史民俗博物館保管

【大きさ】身丈154.5cm 裄64.0cm

本件は、^{しょうじろう}野村正治郎衣装コレクションの中の一領で、^{しじゅう}刺繍と絞りをを用いて菊と流水を表した小袖である。菊と流水の組み合わせは、小袖文様においてとりわけ使用されたモチーフだが、その遺品はごくわずかであり、本小袖は貴重な作例である。また、本小袖は典型的な寛文小袖の文様を構成しながらも、^{すりばく}摺箔と金糸の刺繍が併用されていることから、^{げう}寛文小袖の加飾技法が摺箔から刺繍に移行する過渡的な様相を示す希有な作例である。

（江戸時代）



わりこうだいちゃわん
② 割高台茶碗

一口

【所有者】公益財団法人畠山記念館（東京都港区白金台2-20-12）

【大きさ】高さ9.0～9.6cm 口径11.9～13.5cm 高台径7.9cm

本件は、朝鮮半島で焼かれ、茶の湯の茶碗に見立てられた、いわゆる高麗茶碗の一種である。元来は儒教の祭祀に用いられる祭器であり、高台の四隅を切っていることから割高台茶碗と呼ばれる。割高台茶碗の伝世品は数碗しかないことから珍重され、なかでも古田織部所持と伝えられるこの茶碗は、高台周りの荒々しい篋使いをはじめとする豪放な作風により、最も高く評価されている。

（朝鮮時代）



はくじちようぼたんうきもんたいへい 三代清風與平作
③ 白磁蝶牡丹浮文大瓶

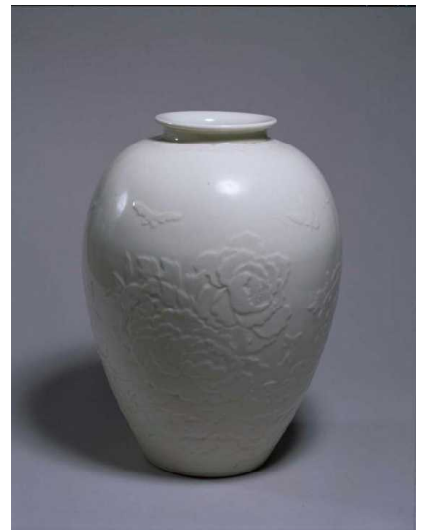
一口

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園13-9）
東京国立博物館保管

【法 量】高38.1cm 口径13.8cm 胴径29.2cm 底径13.6cm

本件は、明治26年に開催されたシカゴコロンプス世界博覧会に出品された作品である。同博覧会では、工芸を取り込んだ日本独自の美術の粋組みを世界に示そうと試みられ、一定の成功を収めた。この作品は、博覧会において評価が高く、三代清風與平は会期中に陶芸家として初の帝室技芸員に任命された。欧米への輸出を主眼とする産業品とは一線を画した、明治20年代の陶芸が目指した方向性が明確に打ち出された作品として貴重である。

（明治時代）



④ ^{かちようまきえらでんしゆき}花鳥蒔絵螺鈿酒器 **六本**

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園13-9）
京都国立博物館保管

【法 量】高30.0～30.8cm 11.5×11.8cm

本件は、総体を^{くろうし}黒漆塗りとした上に、^{きんひらまきえ}金平蒔絵と^{らでん}螺鈿の技術を併用して、多様な^{かじゆもん}花樹文や^{ちようじゆもん}鳥獣文を組み合わせ、器体全面に装飾を施した華やかな飲食器である。箱に収められる6本の酒器は、17世紀初期の輸出用漆器として、数多く製作された^{なんばんしつき}南蛮漆器の遺品の中でも特に精美な作品であり、当時盛んであった南蛮貿易の様相を示す貴重な資料である。

（桃山時代）



⑤ ^{きんさいじこうがたこうろ}三彩兕觥形香炉 ^{おくだえいせん}奥田穎川作 **一合**

【所有者】宗教法人建仁寺
（京都府京都市東山区大和大路通四条下る四丁目小松町584）

【法 量】通蓋高28.0cm 身径16.3×26.0cm
蓋径15.8×26.8cm 底径12.6×14.2cm

本件は、江戸時代後期の京焼に新風を吹き込んだ^{おくだえいせん}奥田穎川の代表作である。京都の裕福な質屋奥田家の養子となり、^{ぶんじん}文人陶工として、当時流行していた中国趣味を背景に、技法や器形に中国風の要素を取り入れ、そこに独自の翻案を加えた作品を制作した。この香炉は、中国古代青銅器の^{じこう}兕觥の器形に、^{ふつけん}明時代末に福建地方で行われていた三彩の釉を施している。江戸時代後期の京焼における、中国文化受容の特色がよく表れた作品として貴重である。

（江戸時代）



<書跡・典籍の部>

(重要美術品を重要文化財に 1件)

① 万葉集(紀州本) 二十帖

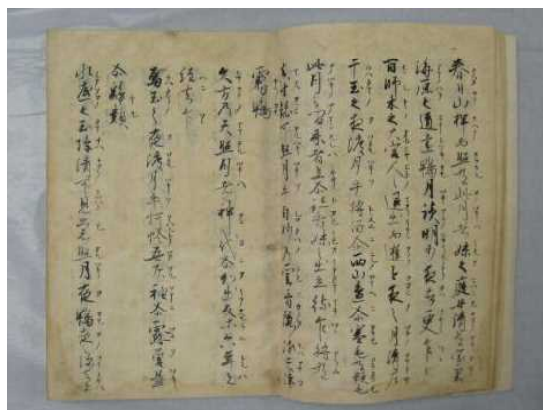
【所有者】公益財団法人後藤報恩会(愛知県名古屋市昭和区汐見町4-1)
昭和美術館保管

【大きさ】縦21.6cm 横14.8cm

本書は、鎌倉時代書写になる次点本10巻と室町時代書写になる仙覚(1203~?)新点本10巻からなる『万葉集』20巻揃いの完本として極めて貴重な存在で、かつて紀州徳川家に伝来したものである。

カタカナにて和歌に読みが付されており、『万葉集』の訓読史料としても重要な伝本である。

(鎌倉時代・室町時代)



(有形文化財を重要文化財に 2件)

① 密要鈔 六百四点

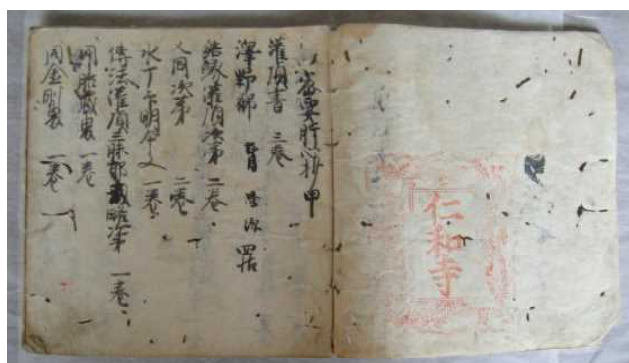
【所有者】宗教法人仁和寺(京都府京都市右京区御室大内33)

【大きさ】聖教等目録(縦15.8cm 横15.0cm)

密要鈔は、仁和寺の守覚(1150~1202)が後七日御修法をはじめとする各修法や法会など、真言宗の広沢流と小野流とが相承する作法・次第を集大成した聖教のまとめりである。

なかには治承2年(1178)の建礼門院(1155~1213)御産御祈のために守覚自らが修した際の自筆次第書が残されており、皇子(安徳天皇)降誕という験を発揮したことを記している。鎌倉時代を中心とする真言密教の実像を伝える代表的な聖教として貴重である。

(平安時代~江戸時代)

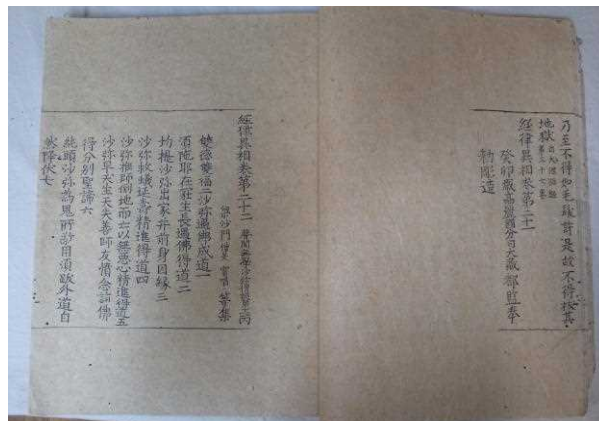


② 高麗版一切経 三巻、二帖、千十六冊

【所有者】宗教法人多久頭魂神社（長崎県対馬市厳原町豆敷1250）
【法量】縦41.0cm 横32.0cm

本経は、対馬の宗氏当主が15世紀後半に朝鮮から将来した再彫版の高麗版一切経である。料紙の色は白、黄、赤茶などがあり、紙の原料の違いによるものと推定される。

大型の袋綴装冊子本は制作当時の姿をそのまま残しており、印刷史、仏教史、交流史上に貴重なものである。
(朝鮮時代)



<古文書の部>

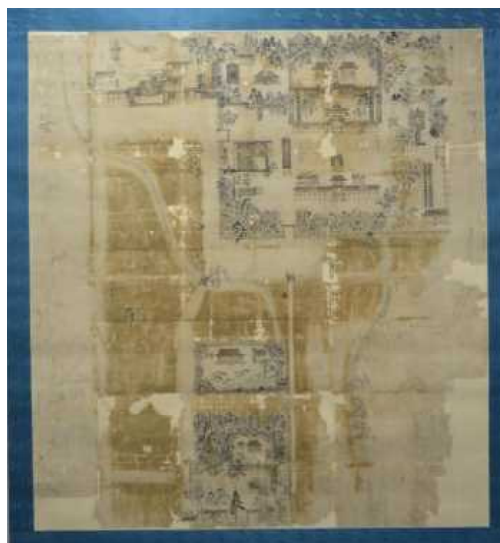
(有形文化財を重要文化財に 4件)

① 賀茂御祖神社絵図 一幅

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園13-9）
京都国立博物館保管
【法量】縦214.0cm 横193.5cm

本絵図は、ただすの森に鎮座するかもみおやじんじや（下鴨神社）の境内全域の景観を描いた室町時代の絵図である。北側に東西の本殿、齋院の居所など、南側にじんぐうじとかわいしやの建物などを詳細に描き、朱や緑青などで彩色を施している。

絵図の景観年代は鎌倉時代であり、神仏習合時の下鴨神社の様子を詳細に記す最古の絵図として貴重である。
(室町時代)



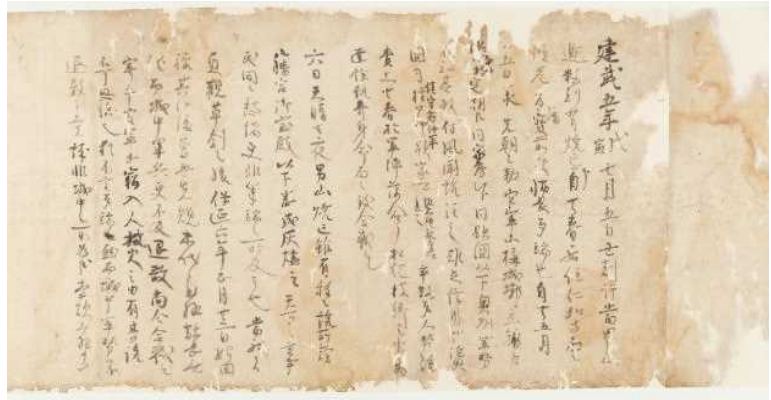
② ^{なかのいんいつぼんき}中院一品記 ^{自筆本十一卷}古写本二卷

十三卷

【所有者】 国立大学法人東京大学（東京都文京区本郷7-3-1）
東京大学史料編纂所保管

本件は、北朝の公家として活躍した中院通冬（^{なかのいんみちふゆ}1315～1363）の自筆日記である。中院家は、大納言通方（^{みちかた}）を始祖とする村上源氏で、家格は大臣家である。

南北朝の内乱の様子をつぶさに伝える数少ない公家の日記であるとともに、日記作成の在り方を示す記録としても貴重である。
(南北朝時代)



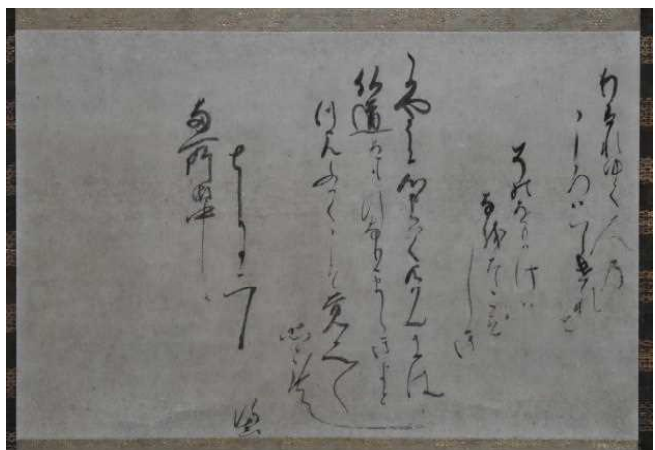
③ ^{みようほういんもんじよ}妙法院文書（七百二十九通）

四十二巻、二十一冊、二帖、十四幅、四百三十一通、二十七枚、二双、一包

【所有者】 宗教法人妙法院（京都府京都市東山区妙法院前側町447）
【法量】 後白河法皇書状案（縦28.3cm 横43.2cm）

本文書は、天台宗の門跡寺院である妙法院に伝来した文書のまとまりである。

^{ごようせいてんのう}後陽成天皇（1571～1617）ら歴代天皇宸翰などが当初の姿のままに多数残されている。また豊臣秀吉（^{ひでよし}1537～1598）の小田原攻め、豊臣秀頼（^{ひでより}1593～1615）の大仏開眼供養、慶長19年（1614）の方広寺鐘銘事件など歴史上重要なことがらに関する文書がある。その他、大仏殿を描いた図なども含まれている。
(平安時代～江戸時代)



④ ^{かじゆうじもんじよ}勸修寺文書（九百三十五通） 八十六巻、二十四冊、百二十九通、三綴

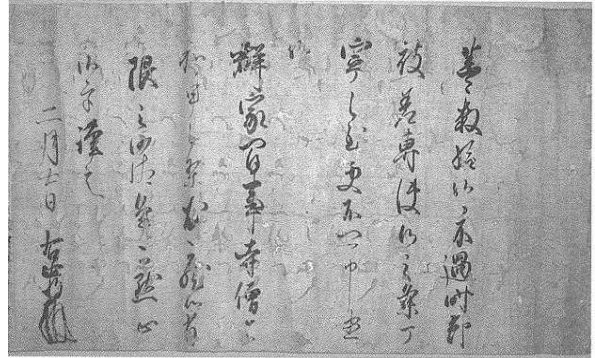
【所有者】宗教法人勸修寺（京都府京都市山科区勸修寺仁王堂町27-6）

【法量】源実朝書状（縦31.9cm 横54.6cm）

本文書は、醍醐天皇（^{だいごてんのう}885～930）の創建になる真言宗寺院である勸修寺に伝来した中世文書を中心とする文書のまとまりである。

寺領安堵に関する各時代の権力者からの文書や勸修寺近郷の田畠の売券、譲状など寺領関係文書が多数残っており、庄園体制下における社会・経済などの様相を通観できる史料群として貴重なものである。

（平安時代～江戸時代）



<考古資料の部>

(有形文化財を重要文化財に 7件)

① 茨城県泉坂下遺跡出土品 一括

【所有者】常陸大宮市（茨城県常陸大宮市中富町3135-6）
常陸大宮市歴史民俗資料館保管

【法 量】人面付壺形土器 高77.7cm，胴経38.0cm ほか

本件は、久慈川右岸の微^{びこうち}高地上に所在する弥生時代中期の集^{じんめん}団墓地からの出土品一括である。人面付壺形土器^{じんめんつきつぼがたどき}1点，壺形土器^{かめがた}53点，甕形土器^{かづせき}残欠2点と，滑石製の玉^{たま}5点で構成される。特に口縁部を半球形に膨らませてその部分を頭部に見立て、面長の顔面が表現された大形の人面付きの壺形土器は、造形的にも特筆される。

これらは、弥生時代における東日本の葬制を具体的に示すとともに、大形の人面付き土器を含む葬送儀礼に用いられた土器の一括として、学術的価値が高い。(弥生時代)



② 栃木県甲塚古墳出土品 一括

【所有者】下野市（栃木県下野市笹原26）
下野市立しもつけ風土記の丘資料館保管

本件は、栃木県下野市の古墳から出土した埴輪を中心とした一括である。なかでも機織^{はたおり}の場面を表した2点の機織形埴輪は、我が国で唯一の出土例である。また、馬形埴輪や人物埴輪、須恵器^{はじき}や土師器は、遺存状態の良い個体が多く、埴輪の一部には赤や白、黒、灰などの彩色が残る。

機織形埴輪は、織機^{しよくふ}や織布技術の起源を知ることのできる貴重な資料である。また本件は、当時の葬送儀礼を知るうえでも重要である。(古墳時代)



③ ^{ぐんまけんしもじゆくいせきしゆつどひん}群馬県下宿遺跡出土品 一括

【所有者】太田市（群馬県太田市浜町2-35）
太田市立新田荘歴史資料館保管

本件は、渡良瀬川右岸の低位段^{だんきゆう}丘上に形成された遺跡からの出土品一括である。
器形^{きけい}が復元できる個体を含む、縄文時代草創期の深鉢形土器・土器片36点と、
尖頭器^{せんとうき}や石鏃^{せきぞく}など小形の剥片石器^{はくへん}61点で構成される。

これらは、わが国における土器出現期の一様相を示す、爪形文土器^{つめがたもん}の復元個体を複数含む、極めて纏まった一括であり、日本列島における旧石器時代から縄文時代への移行期の様相を示す一例として、学術的価値が高い資料である。（縄文時代）



④ ^{とうきやうとのげおおつかこふんしゆつどひん}東京都野毛大塚古墳出土品 一括

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園13-9）
東京国立博物館保管

本件は東京都世田谷区^{とうす}の古墳から出土した一括である。この時代に特徴的な石製模造品が中心で、多量の刀子や鎌、坏や埴、履（下駄）など種類豊富な模造品が含まれる。特に導水祭祀施設^{そう}の一部を表現したとみられる「槽」は国内に例がなく、明日香村^{あすか}にある酒船石にも形状が似ていることが知られている。

本件は、古墳時代における水を介した祭祀を考える上で、重要な資料を含むとともに、充実した東日本における古墳副葬品の一括である。

（古墳時代）



⑤ ^{せきぼう}石棒

四本

【所有者】 国立市（東京都国立市富士見台2-47-1）

くにたち郷土文化館保管

【法 量】 長103.6～112.5cm，幅12.0～13.9cm

^{みどりかわひがし}緑川 ^{あおやぎ}東遺跡は多摩川中流域の左岸，^{あおやぎ}青柳段丘面に営まれた縄文時代中期末から後期の集落跡である。石棒は，この集落内に所在した敷石遺構の床面に，四本が並列して横たえられた状態で出土した。

いずれも長さが1メートルを超える大形品で，^{あんざんがん}安山岩系の石材を素材とし，^{こうだ}敲打成形で棒状に整えて，うち3点にはその一端に二段の円頭形の頭部をつくっている。典型的な縄文時代中期の大形石棒だが，周辺からは後期初頭の土器も出土していて，この石棒がある程度伝世していたことを窺わせる。

縄文時代の精神生活や，その埋納の具体的な状況を示した極めて学術的価値の高い資料である。

（縄文時代）



⑥ ^{ふくおかけんはかたいせきぐんしゅつどひん}福岡県博多遺跡群出土品

一括

【所有者】 福岡市（福岡県福岡市中央区天神1-8-1）

福岡市埋蔵文化財センター保管

本件は，中世を中心とした時代に，アジア地域に対する国際貿易拠点として栄えた港湾都市遺跡の出土品一括である。当時の有力者が競って手に入れた白磁や青磁，青花などの貿易陶磁器が多量にあり，博多に住み着いた宋人商人「綱首」の存在を示す墨書土器や中国系瓦資料も含まれる。また，商業都市としての博多とその住人の生活実態を示す衣食住や生産・経済活動関連の資料など多彩な品々で構成される。

わが国における中世の盛んな対外貿易の実態と，その玄関口となった国際貿易都市博多の具体的な姿を明らかにする貴重な資料群である。

（平安時代～安土桃山時代）



くまもとけんかとうだひがしぼるいせきしゆつどひん
⑦ 熊本県方保田東原遺跡出土品

一括

【所有者】山鹿市（熊本県山鹿市山鹿987番地3）
山鹿市出土文化財管理センター保管

菊池川かがんだんきゆうの河岸段丘上に営まれた、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした環濠集落遺跡かんこうしゅうらくからの出土品一括である。これまで、六十次の調査で多量の弥生土器をはじめ、豊富な鉄製品が出土している。

出土遺物は多彩で、在地の土器に加えて山陰・中国地方や九州北部からの搬入品も多く、鉄斧や石庖丁形鉄器てつぶ いしぼうぢょうがた、巴形銅器ともえがたどうき、銅鏡どうきようなどの金属製品も豊富である。

また、これに石杵や敲石いしぎね たたきいしなどベンガラベンガラの調製に関わる石器も組み合う。遺跡の大部分はいまだ未調査で、出土品は遺跡の片鱗を示すに留まるが、中九州地方で繁栄した大規模集落における、当時の生業・精神活動等を復元する上で、その学術的価値には高いものがある。

(弥生時代～古墳時代)



<歴史資料の部>

(有形文化財を重要文化財に 7件)

① 陸奥国仙台領元禄国絵図関係資料

二百六十五点

【所有者】宮城県（宮城県仙台市青葉区本町3-8-1）
宮城県図書館保管

元禄10年（1697）に開始され同15年に終了した元禄国絵図事業において、幕府は各国絵図と郷帳ごうちょう等の提出を各藩に求め、国郡境の明確化、往還筋の距離表記の統一をはかり、各地域の実態把握を進めるとともに、最終的に日本図作成を企画した。

本件は、仙台藩に一括して伝来した元禄国絵図事業に関連する国絵図・際絵図きわなどの絵図類及び文書・記録類である。質量ともに豊富に伝来する稀有な事例として元禄国絵図ひいては国絵図研究上に重要であり、地図史、政治史等研究上に学術価値が高い。

(江戸時代)



(宮城県提供)

② ① ^{まえだ げんいあて} 前田玄以宛
② ^{みんこくさつぷ} 明国劄付

一幅

【所有者】 国立大学法人東京大学（東京都文京区本郷7-3-1）
東京大学史料編纂所保管

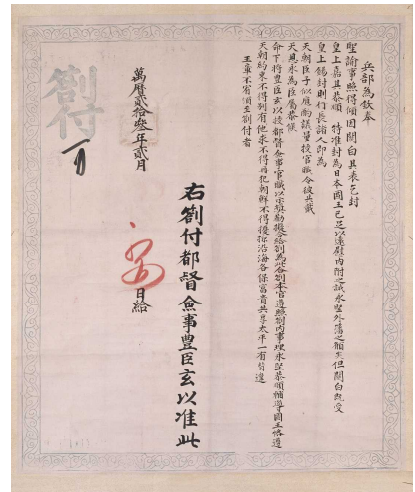
【法 量】 100.8cm×85.4cm

劄付は明国における^{とうあん} 檔案（公文書）の一形式で上級官から下級官に出した下達文書である。

本状は万暦23年（文禄4年・1595）^{へいぶ} 兵部から前田玄以に宛て、明の武官である^{ととくせんじ} 都督僉事に同人を任じたもの。文禄の役後の日本と明国との間の和平交渉に際し、^{さくほう} 豊臣秀吉の冊封と同時に秀吉政権の諸大名、奉行衆らに各々官位を授けた際の文書の一通である。

劄付原本は、我が国には現在三通が伝存するのみであり、当該期の東アジア諸国に多大な影響を与えた戦争に関する類例稀な外交文書原本であり、古文書学、東アジア外交史研究上に重要である。

（明時代）



（東京大学史料編纂所提供）

③ ナデ六一四一号電車 ^{てつどういん} 大正三年、鉄道院新橋工場製

一両

【所有者】 東日本旅客鉄道株式会社（東京都渋谷区代々木2-2-2）
鉄道博物館保管

本件は、車体全長約16メートルの木製二軸（四輪）ボギー式電車で、大正3年度までに35両が製造されたナデ6110形の車両のうちの第32号車にあたる。

都市近郊における鉄道輸送の需要増大に対応するために、鉄道院で最初の3扉車であるとともに、総括制御装置を導入し、重連の高速運転を可能とした点が最大の特徴で、構体、台車等は国産製品、電気機器は米国にて製造された。

本車両は、大正時代に山手線、中央線で使用されたもので、我が国における電車の近代化、標準化の歩みを知るうえで、鉄道史、交通史上に重要である。

（大正時代）



（鉄道博物館提供）

④ ^{とうきょうち かつてつどう}東京地下鉄道一〇〇一号電車 ^{につぼんしやりようせいぞう}昭和二年、日本車輛製造株式会社製 一両

【所有者】公益財団法人メトロ文化財団（東京都千代田区神田須田町1-5-11）
地下鉄博物館保管

本件は、車体全長約16メートルの全鋼製二軸（四輪）ボギー式電車で、昭和2年、東洋初の地下鉄開業（浅草・上野間）にあわせ、日本車輛製造株式会社にて製造されたモハ1000形10両のうちの第1号車である。

昭和43年に引退するまで、一貫して浅草・渋谷間（現在の銀座線）にて使用された。

集電方式は第三軌条式で、全鋼製、自動扉、自動列車停止装置の採用などの防災・安全対策や、内装、照明、吊り手等の乗客向けの設備に地下鉄ゆえの特徴が見られる。我が国の地下鉄電車の嚆矢であるとともに、後の地下鉄車輛の規範となった車輛であり、鉄道史、交通史上に重要である。

（昭和時代）



（地下鉄博物館提供）

⑤ ^{につぼんまる}日本丸 ^{かわさきぞうせんじよ}昭和五年、株式会社川崎造船所製 一艘

【所有者】横浜市（神奈川県横浜市中区港町1-1）

【大きさ】全長97.05メートル

日本丸は船員養成用の練習帆船として文部省が発注した船で、昭和5年（1930）に進水した。全長97.05メートル、総トン数2278.25トン、横肋骨方式リベット構造の鋼製補助機関付帆船である。帆装は4本マストバーク型、主機関は国産初の大型ディーゼル機関である池貝鉄工所製造の無気噴油式四サイクルディーゼルエンジンを搭載する。

日本丸は、昭和59年にいたる長い期間にわたり船員養成の任を担い、我が国の海運業の発展に貢献した。現存稀少な戦前期建造の船であり、建造当時の構造、艤装をよく伝え、わが国の海運史、造船技術史等研究上に貴重である。（昭和時代）



（公益財団法人帆船日本丸記念財団提供）

⑥ だいにほんしへんさんきろく 大日本史編纂記録

二百四十八冊

【所有者】 国立大学法人京都大学（京都市左京区吉田本町）
京都大学総合博物館保管

徳川光圀（1628～1700）の命により編纂された『大日本史』の編纂にあたり、水戸藩史館（彰考館）にて作成された記録群である。編纂実務を担当した史館員間で取り交わされた書状下書である「往復書案」が大半を占め、多くの学者が膨大な文献の収集と厳密な考証を行う様子を具体的に知ることができる。

前近代における我が国最大の史書であり、同時代のみならず後代の学問・思想に多大な影響を与えた『大日本史』編纂の経過を跡づけるもので、江戸時代の学問、思想を研究するうえで価値が高い。（江戸時代）



⑦ いぬおおものかんけいしりよう 犬追物関係資料（島津家伝来）

しまづけでんらい 六百六十五点

【所有者】 株式会社島津興業（鹿児島市吉野町9700-1）
尚古集成館保管

犬追物^{かきかけ}は走る犬を馬上から驀目の矢で射て、当たり矢の数などを争う武芸で、笠懸・流鏑馬と並び中世武家に広く流行した。しかし、戦術の変化に伴い江戸時代には衰退するなかで、島津家では断続的に明治年間まで犬追物を伝承し、張行^{ちようこう}（実施）した。

本件は、室町時代から江戸時代に至る典籍・文書類610点、明治時代のものを中心とする装束・弓馬具類44点及び写真ガラス原板11点から構成される。

島津家における犬追物の故実受容のありさまや犬追物張行の実際を明らかにするだけでなく、我が国における犬追物の故実の形成、展開を知るうえで、質量ともに最も豊富かつ類例のない資料群として学術価値が高い。

（室町時代～明治時代）

